

教師夏目金之助の研究（九）

一 森田草平との師弟関係

森 下 恭 光

緒言

本論文において考究するのは、夏目金之助が東京帝国大学英文科講師を務めていた時期に同大学同科の学生として直接にその指導を受けた学生の一人で、自身「私は誰よりも一番先生に迷惑を懸けた、世間的、社会的並びに物資上の迷惑を懸けた。」⁽¹⁾と公言する森田草平（本名米松）との師弟関係の特質である。

夏目とその門下との師弟関係は、かつて長谷川如是閑（夏目と親交があった）が「あんな師弟関係は昔だってありゃしない」⁽²⁾と評した程情誼の厚いものであったとされているが、夏目と森田の師弟関係は其中でも特筆されるべきものと考えられるので、その特質をそれが最も顕著に表われている書簡の往来を中心にして明らかにすることを本論文はねらいとするものである。考究する対象になる期間は明治三十六年より同三十九年までとする。

一

森田草平（本名米松、明治十四年一昭和二十四年）が夏目金之助を知ることになったのは、彼が第一高等学校文科三年に在学していた時であった。その時期は、夏目金之助が2ヶ年に亘るイギリス留学を終え、熊本の第五高等学校を辞職し、東京帝国大学英文科講師、第一高等学校講師に就任した明治三十六年に当たる。森田の回想によれば当時の夏目に関する彼の認識としては英国留学より帰国早々の英文学の偉材であり、正岡子規の友人であることを知る程度で、格別のものではなかった⁽³⁾。したがって、夏目が森田の在籍する文科ではなく理科を担当することになったことを知ってもとくに失望することはなかった。

同年六月、森田は第一高等学校を卒業して東京帝国大学英文科に籍を置くことになる。そこでは当然のこととして、森田は夏目の講義を受けることになる。そこで森田が受講することになったのは夏目が担当した『文学論』とシェイクスピアの作品の講義のうち、後者の方で、前者の「文学論」は受講しなかった。このことにも表われているように、当時の森田にとって夏目の存在は後に見られるような絶対的ともいえる存在ではなかった。夏目はそのことを知っていて、後に、「君は僕の『文学論』の講義を聞かなかったね。」⁽⁴⁾と言ったという。

一方の、森田が受講したというシェイクスピアの講義も決して熱心に受講したというわけではなかった。それでも夏目の講義が「まづ先人の説をいろいろ挙げて置いて、最後に自家の断案を下されるのを常とした」⁽⁵⁾ことを指摘し、夏目の英文学者としての卓越性を

学生として実感していた。

もともと森田が大学で英文学を専攻することになったのは、英文学を研究し英文学者になることを志望したからではなく、小説家になりたいというのがその動機であったという。⁽⁶⁾

そのような森田にとっては、夏目の講義はいかにそれが学問的に卓越したものであっても、そのこと自体が森田を没入させる程の魅力を持つことにはならなかった。

森田が夏目のシェイクスピア文学についての講義について最も印象的であったこととして紹介しているのは、講義の内容そのものではなく次の逸話である。時期は明治三十八年十一月であったと推測される。⁽⁷⁾

場所は旧文科大学講堂の正面2階の大教室で、そこでは、英文科学生 of 1回、2回、3回生を通じて全員が聴講することになっていた。その講義の最中、夏目は突然教壇を降り、教室の中程に着席している学生の側に寄り注意をした。理由は、その学生が夏目の講義を受講している間、毎回、懷に手を入れて聴いている態度を失礼な態度と考えたからである。ところが、注意を受けた学生は一向にその態度を改めず、依然として懷手のままなので、夏目は更に強く責めた。やがてその学生は、一方の腕が無いためそうしていることが側の学生の発言で分かり夏目は赤面し、言葉を失なう。教壇に戻った夏目は暫く沈黙した後に伏せていた顔をあげ、「いや、失礼をした。だが、僕も毎日無い知恵を絞って講義をしているんだから、君もたまには無い腕でも出したらよかろう」⁽⁸⁾ と言って講義を続けたというのである。

この逸話を紹介した上で森田は、夏目の言動の非常識を責める声があったことを指摘し、それが当を得ない批判であるとして夏目を弁護している。森田によれば、「あの洒落で、先生は自分の不意を喰って惑乱した気持ちを鎮めると共に、相手に詫びを言っていたと考えるべきである。」⁽⁹⁾

森田はこのことがあって以来、「急に先生の心の一端に触れたような気がして、その人柄に一種の懷しみを感ずるようになったことは争えない」⁽¹⁰⁾ と述懐している。講義の最中に懷手をして聴く学生を責めたことに端を発するこの逸話は、その時教室に居た学生の口を経て伝播されたため、評判になっていたことと、それが必ずしも正確に伝えられているとは言えないため、この森田の弁護は必要な処置であると言えよう。夏目に近い存在であり、夏目の講義を受けた野上豊一郎でさえ、この件に関する記述は森田のそれとは微妙に異なっている⁽¹¹⁾ ことによってもその事は明白である。

森田が大学に籍を置いた時期の英文科では前任者の小泉八雲の後を受けて、外人講師のロイド、夏目、上田敏が新任として入って来た時であり、学生達の一部には歓迎しない空気もあった。そのような背景があって、当初、夏目に対しては種々な誤解を生む素地があった。

このことは夏目自身も強く意識していたところがあり、夏目夫人によれば夏目は当初、「小泉先生は英文学の泰斗^{たいと}でもあり、また文豪としても世界に響いたえらい方であるのに、自分のような駆け出しの書生上りのものが、その後釜^{あとがき}にすわったところで、とうていりっぱな講義ができるわけのものでもない。また学生が満足してくれる道理もない。」⁽¹²⁾ と述懐していたという。

その上、留学中から続いていた精神的苦悩が重なり、帰国した明治三十六年七月ごろよ

り神経衰弱が昂じ、約二ヵ月妻子と別居し、さらに同年十一月、神経衰弱が再び昂ずるという時期でもあった⁽¹³⁾ことを思量すると、公的生活としての教師生活と私的生活としての家庭生活の調和が失なわれていた時期であったと考えられる。

しかし、その不調和は夏目の人格を破壊するまでには作用しなかった。教師生活の方では当初不評であった彼の講義も、徐々に評価を高めて行き、とくにシェイクスピア文学に関する講義は好評で、その講義を受けた松浦一によれば、「二十番の大教室がいつも一ぱいだったと覚えている」⁽¹⁴⁾と述べている。

また、創作意欲も旺盛な時期であった。『従軍行』（明治三十七年、五月）、『英国現今の劇況』（明治三十七年、七、八月）、『尼』（虚子と合作、明治三十七年十一月、十二月）と作品を発表し、明治三十七年十二月には、「山会」と称する文章会を作り⁽¹⁵⁾、メンバーの作品を朗読発表する場とした。『我輩は猫である』が虚子によって朗読されたのもこの時である。この会は翌年（明治三十八年）から活発になり、夏目夫人によれば、三月ごろから毎月一回ぐらいの頻度で催されたという。この会のメンバーは高浜虚子、坂本四方太、皆川正禧、野間真綱、野村伝四、河東碧梧桐などが主なもので、⁽¹⁶⁾森田より一世代前の人々によって構成されていた。

さて、森田が夏目の講義を受講する学生の立場から、個人的な接触をするようになった経緯はどのようなものであったか。まず、森田の側から言うと、夏目に積極的に近づきにくい理由があった。それは「私が大学に於てあまり成績の好くない学生であったということである。」⁽¹⁷⁾森田が自分の不成績を理由にあげるのは必ずしも妥当ではなく、その性格に見られる消極性にあったのではないかとの推測も成立つであろうが、森田自身はそう弁解する。同輩の中川芳太郎が成績優秀で夏目からも目を付けられていたことを意識しての理由づけであろう。中川は、大学二年になった明治三十八年春頃より夏目を訪ねるようになり、同年九月に三年に進級した時期には、中川の出身高等学校（第三高等学校）同級の鈴木三重吉を夏目に紹介する迄になっていた。⁽¹⁸⁾

一方、森田はこの時期（明治三十八年）、三年に進級した秋ごろより、上田柳村（本名、敏）、馬場孤蝶（本名、勝弥）を主宰者とする『芸苑』と称する純文芸雑誌の刊行計画に加わるようになっていた。『芸苑』の発刊は明治三十九年一月ということになり、森田も作品を掲載することになった。作品は『病葉』と題するもので、10枚程度の小品であった。主宰者が夏目と同僚の上田であったということもあってか、森田は『芸苑』発刊の予定を夏目に告げた。明治三十八年の暮のことである。これが森田の夏目を自宅に訪ねた最初であり、それは同時に、森田と夏目が個人的接触をした最初でもある。当時、夏目は本郷区駒込千駄木57番地に居住していた。やがて『芸苑』が夏目宅に書店より届けられ、それに森田の作品「病葉」が掲載されているのを認めた夏目は早速その感想を記した書簡を森田宛に送っている。明治三十八年十二月三十一日付の書簡がそれである。書中初めの部分に「よく出来て居ます。文章杯は随分骨を折ったものでしょう。趣向も面白い」⁽¹⁹⁾とまず賞讃し、次いで、「然し美しい愉快的感じが無いと思います。中略。然しあれをもっと適切に感じさせるのはあの五六倍かかると成程とは思われぬですよ。」⁽²⁰⁾と助言をしている。そして、末尾に森田とは作風の異なる伊藤左千夫の『野菊の墓』を読むことを勧めている。しかも、それだけに止まらず、一旦筆を置いた後で翌日の日付で、「今朝又読み直して見まし

た。中略。あれ丈の短篇では今少々活躍させんと完璧とは言われない。それでなければもっと長くかく。」⁽²¹⁾と書き加えている。この書簡が森田に宛てた夏目の最初の書簡であることと、一度だけ自宅に訪れた学生の作品に対する書評であることを考えると、夏目の誠実さを象徴する一件であると言ってよい。

この書簡を受け取った森田の感想は次のようなものであった。「私が漱石先生からこの手紙を頂いたということは、私の一生に取っては、殆ど心の革命を齎したと言ってもいい程の大事件であった。中略。私は先生に依って認められた。好かれ悪しかれ、俺は先生に依って自分の存在を認められた。これが偽らざる感想であった。」⁽²²⁾と率直な気持ちを吐露している。そして、「最も深く私を感動させたのは、明るく朝もう一度私の作を読み直して下さったという事実である。」⁽²³⁾と夏目が森田の作品を二度にわたって読んでくれたことに感激している。このことを契機にして森田と夏目の個人的関係としての師弟関係は始まる。

二

夏目より書簡を受け取り感激した森田は、直後に返書を出したい心境であったが、夏目の書簡に伊藤左千夫の『野菊の墓』を読むことを勧める内容があったため、急ぎ同書を読み、その所感を含めて長文の手紙を書いた。⁽²⁷⁾

その書簡に対して、夏目は明治三十九年一月八日付の長文の返書を送っている。その冒頭に「小生は人に手紙をかく事と人から手紙をもらう事が大すきである。」⁽²⁴⁾と書き、自分が森田に返書を認めることをむしろ積極的に行っていることを告白している。夏目が自ら記しているように、彼は手紙を書くという行為を楽しむところがあり、生涯において多数の書簡を認めている。酒井英行によれば、「明治三十二年五月十三日の正岡子規宛書簡から大正五年十一月十九日の大谷正信宛書簡までのおよそ二千三百七十通が現存している。」⁽²⁵⁾

さて、夏目の書面は、森田が『野菊の墓』に加えた書評に関する自身の感想に移る。『野菊』を御読みの由。詳細の御評拝見御尤もの事ばかりです。中略。趣向は仰せの如く陳腐です。寧々月並臭を脱しない。然し仰せの如く月並臭くないからいい。それから君の非難をする箇所は一々尤もである。」⁽²⁶⁾とあるように、夏目は森田の所感を大筋において認め、同感である旨を伝えている。この後につづく書面で、夏目独自の見解を述べてはいるが、それとても森田の所感を否定するものとして提示されているのではない。つづく書面の中において再び森田の作品『病葉』に触れ、「容赦なく言えば君は文に凝り過ぎて失敗しような懸念が僕にある。あまり凝ると抜目がない代りに何となく窮屈な苦しい感じがするでしょう。第一長いものは到底根気がつづかないと思う。」⁽²⁷⁾と書評に加えて助言をしている。そして、末尾に、「僕は君の文が出る度に読みます。そうして時間の許す限り、心づく限りは愚評を加える積りです。其代り悪口を言っても怒ってはいけません。大学では君の先生かも知れないが個人として文章杯をかく時は同輩である。^(依も筆者)決して僕に対して気を置いてはならぬ。君はあまりに神経的、心配的、人の心を予想しすぎる様な傾向ありはせんかと思う。他人に対してはとにかく僕に対してはそうせん方がいい。君も気楽でいいでしょう。」⁽²⁸⁾とまで記している。とくに傍点を付した、夏目が森田を「個人として文章杯をかく時は同輩である。」と記した部分は、帝国大学の教官が社会的に著しい権威を持っていた当時において、教官が一学生に伝える言語としては常識を超えるものである。それを夏目の側では

特別のこととも考えず行っているところに夏目が示す師弟間の情誼に見られる卓越性がある。

この返書を受け取った森田の感激は更に高まる。森田によれば、「それに付け上ったわけでもないが」⁽²⁹⁾ と思いつつ再び長文の手紙を夏目に送る。しかし、その時は、夏目から再び返書が来ることなど夢想だにできなかった。

ところが、日を経ずして再び夏目からの返書が届く。一月十日付の書簡がそれである。

この書簡でも夏目は自分が手紙を歓迎する人間であることを表明して、次のように記している。「何か不平でも気炎でも洩したい時に時間があつたらいつでも僕の所へ言って寄こしてくれ玉え。僕は読むのを楽しみにして居る。」⁽³⁰⁾ と書いた後、森田が『野菊の墓』の批評を書く意欲を示していることに触れ、その実行を勧めている。森田が夏目に披露した『野菊の墓』の書評執筆の意欲とは、具体的には、『芸苑』に掲載することを指していたらしい。⁽³¹⁾ 続く書面に「君は衣食の為に充分学問が出来んのを苦痛に感じて居る様だが御尤もです」⁽³²⁾ と述べた後で、学生時代に自身が経験した経済的困難について記して、同情を示した上で、「僕もそれだから大に聡明な人になりたい。学問読書がしたい。従ってどうか大学をやめたいと許り思つて居ます。」と自己の願望まで披瀝している。この部分で、疑問が生ずるのは、夏目が「学問読書がしたい。従ってどうか大学をやめたい」と言うところである。常識的には大学という職場こそ学問読書を可能にする最適の職場と考えられているからである。しかも、夏目の職場は東京帝国大学で、いわば、学問読書をする場としては、当時のわが国では最高の環境にある場であつたはずである。この部分を解釈するには、当時、夏目の心境がいかなるものであつたかを調べる必要がある。

夏目が教職に就いている時点で、その教職を辞したいとの願望を外部に対して告白した最初は明治二十九年十月で、その時夏目は、義父中根重一氏に教師（熊本第五高等学校教授）を辞して東京へ出ることについて相談した。⁽³³⁾ 次は、明治三十年で、四月二十三日付の子規宛の手紙に「教師をやめて単に文学的生活を送りたきなり」と⁽³⁴⁾ 記している。この後暫くは同種の希望を外に示すことはなく、イギリス留学の満2年間を経て、三度目に教師辞職の願望を表明するのは、留学から帰国した直後の明治三十六年の夏期である。すなわち、夏目が東京帝国大学と第一高等学校で教鞭を執り始めた時期である。そして、四度目に当たるのが明治三十八年で、この年半頃頃から教師か文学者かの二者択一に悩む。⁽³⁵⁾ ここに見て来たことによって知られる通り、夏目は明治三十九年より十年も遡る時点から教師を辞めたいという願望を持ちつづけていたのである。しかも、その願望は自身の胸中に収め、外に表わすことがなかったというのではなく、その都度身邊の者に告白していたのであるから、夏目の身邊に居る者にとっては決して唐突な告白ではなかった。加えて、夏目の願望は究極的には文学者として生きることにあつたと言えるので、個人的接触が始まったばかりとも言える森田に対して、これ程の親近感を示し、前便に「個人として文章杯をかく時は同輩である」とまで書いたのも決して単なる言葉の遊びに類するものではなかったのである。

しかし、それを受けた森田は、この時点では未だ夏目を十分に理解する段階にはなかったもので、当惑しながらも感激の極限を味わうというのが実態であつたはずである。

長文の書簡には次のような記述がある。「君の手紙を読むと、君の人間を貫いて見るよう

な心持ちがします。^(ママ) 君と二三ヶ月交際しても、あれ程には分るまい。人に自己を打明けるといふ事は放胆の所為である。打明けられた人は、其放胆を褒めるのではない、他に打明けぬものを自分にのみ打明けてくれたという特許を喜ぶのである。」⁽³⁶⁾と記している。

森田は、長文のこの手紙を受け取り感極まったのであるが中でも、末尾のこの部分に感嘆し、「この手紙の中で、最も深く私が心を動かされたのは、『君の手紙をよむと、君の人間を貫いて見るような心持ちがします』という一句である。」⁽³⁷⁾と記している。森田が夏目に宛てた書簡の中で、自己を告白したことを夏目がこのように受け止め、理解と好意を示してくれたことは確かに当人にとっては感銘の深い出来事であったに違いない。森田は自己を分析して告白癖のあることを認めているが、その森田と言えども無差別に告白をしたわけではなく、当然相手を選んでいたはずであり、そのこともまた彼自身自覚している。⁽³⁸⁾

したがって、森田は夏目が自己を告白して支障の無い人物であると判断した上でのことであることは明らかである。

ところで夏目の書簡の持つ特性を門下生の一人である小宮豊隆は次のようにとらえている。「書簡は、漱石の殆んど全時期に亘る、内面生活の表現である。」⁽³⁹⁾、「書簡ほど漱石を、漱石のままに表現しているものはない。」⁽⁴⁰⁾、「漱石ほど沢山弟子たちからラヴ・レターをもらい、また漱石ほど沢山弟子たちにラヴ・レターを書いた者は、類がないと言って可いかも知れない。」⁽⁴¹⁾

小宮の分析するとおりでであるとすると、夏目は多くの者から自己の真実を告白する書簡を受け取り、それに応えて自己を偽ることなく返書を認める人であったということになる。客観的にはそのように分析されるにしても、主観的には、つまり当事者としては、自己にとって唯一の相手として、いわば絶対的存在として対するわけであるから、森田にとっては、他の者がそうであるように、自分にとって唯一人の自己を告白できる相手として夏目を見ていたということができよう。

こうして、前年の暮（十二月三十一日）に夏目が森田に宛てて認めた書簡を受け取ったことに端を発する森田の返書、そして一月十日付の夏目の返書、それらはいずれも長文の書簡であった。夏目の手紙が長いのはとも角として、森田の手紙が長いことは、後に、夏目夫人にも強く印象されており、夫人は「そのころよく手紙をよこす人に森田草平さん鈴木三重吉さんなどがありまして、またたいがい長い手紙でした。」⁽⁴²⁾と回想している。

この後、森田は『野菊の墓』の批評を『芸苑』に、夏目の作品『趣味の遺伝』の批評を『芸苑』に発表した。その後森田が夏目から受け取った書簡は二月十三日付けのものであった。その冒頭には「君の心の状態が果して君の言う所の如くなれば君は少々病気に相違ない。」⁽⁴³⁾と記されている。この部分を読む限り、森田は一月十日付の夏目の書簡に返書を認め、その中で自己の精神的煩悶を訴えたことが推測されるが、森田自身は返書は認めていないという。⁽⁴⁴⁾しかし、夏目は続けて言う「君は最後の手段に訴えて手紙をよこしてのかも知れないが倅僕が君に同情を表して泣言を並べると君は多少頼りになるかも知れないが病気は益はげしくなる。去ればと言って冷淡な返事をすれば矢張りわるくなる。或は月並な説教がましい事を言ったら何の機能もない事となる。是には僕も少々弱るな。」⁽⁴⁵⁾これを見るとやはり森田は返書を送ったと考えるのが妥当である。とに角、夏目は森田の苦悩を知り、助言を与えようとする。そして、言う。「人間として僕は決して君の師表たる

様な資格はない。然し世の中にこんなえらい人になって見たいと崇拜する人間は一人もない。だから君も君で一人前で通して行けば夫で一人前なのだから構うのではないか。中略。君弱い事を言っではいけない。僕も弱い男だが弱いなりに死ぬ迄やるのである。やりたくなくなったってやらなければならん。君も其通りである。」⁽⁴⁶⁾

この書簡を受け取った森田は、「自分も先生からこのような手紙を貰うだけの値打があったのかと、そこに一種の矜りのようなものさえ見出して、急に気が大きくなってしまったことは言うまでもない。」⁽⁴⁷⁾とその感激を記す。これだけの感銘を与え、心境の変化を誘ったことを見れば、夏目の書簡は、慰藉という目的を十分に達成したものであると認められる。この時、夏目は40歳、森田は26歳であった。年齢において14年の差があることは、経験の量においてもそれに比例する差があるのは当然である。しかし、夏目が森田に対してきわめて的確な助言をなし得たのは、経験の量による差によるものではなく、その質の差から来るものと考えるべきである。その質の差は教師夏目と学生森田の学識の差としてとらえるべきではない。もし、学識の差であるとするならば、教師はすべて学生に的確な助言ができるということになる。それでは、夏目と森田の経験の質の差とは何か。その主なる構成要素として、その病歴があげられるであろう。夏目の精神的病歴の一つに神経衰弱があげられる。その病勢の強弱は除いて、年代順にあげると次のようになる。明治三十四年（ロンドン留学中）、同三十五年（ロンドン留学中）、同三十六年（帰国）、同三十七年、同三十八年、同三十九年。これによって明らかなように夏目は、森田が精神的苦悩を抱え、それを告白したその時期でさえ自身は神経衰弱から解放されていたわけではなかったのである。

つまり、その病歴にあらわれる精神的苦悩を伴う経験は、量の上でも、質の上でも森田のそれをはるかに越えるものであったといわざるを得ない。そのように認識するとき、森田の苦悩は、それをはるかに超える程度において夏目自身の抱える苦悩でもあったので、森田への助言は、そのまま夏目自身への自らが与える回答であったということである。

この書簡を送った後、夏目は、同日付（二月十三日）の書簡を森田に出している。内容は前便の趣旨とは異なり、森田が『芸苑』に発表した夏目の『趣味の遺伝』の書評に關することが中心となっている。この書簡を送った直後の二月十五日、夏目は森田に書簡を送っている。3日間で3通という頻度である。しかもこの書簡も長文である。冒頭に「自分の作物に対して後悔するのは芸術的良心の鋭敏なので是程結構な事はない。此量見がなければ文学者になる資格はないと思う。」⁽⁴⁸⁾と前置きした上で、夏目は、自我の縮小をなげいている森田に対して、その長所を数点あげて慰撫している。夏目があげる森田の長所は、同年輩の者に優れる警句がある。手紙の中に巧みな言い廻し、形容の妙な言葉がある。批評において、普通の雑誌記者杯よりも遥かに見識があることなどで、それらを具体的にあげて示した上で、森田に「何故に萎縮するのである。今日大なる作物が出来んのは生涯出来んという意味にはならない。中略。只やる丈けやる分の事である。」⁽⁴⁹⁾と激励する。

この書簡を受け取った森田は「私はこの手紙を何度読み返したことであろう？それは恋人から来た手紙を読むよりも、もっと真剣な、もっと熱烈な態度であった。」⁽⁵⁰⁾と記す。

この後も、夏目と森田の書簡による交信は続くが、この時期程の頻度と長文のものは見当たらない。森田と夏目の交流は、書簡によるだけでなく、森田が夏目の自宅を訪問する

という形によっても行われた。当時の夏目宅に定期的に参集したのは、主に文章会（山会）のメンバーであった。前述のようにそのメンバーは主に森田の一世代前の者達によって構成されていたので、夏目宅を訪問し、その会に同席しても森田が発言する場面はほとんど無く、専らメンバーの所説を聴く立場であった。⁽⁵¹⁾ そのこともあり、夏目との交信は書簡によることが多くなった。この傾向は、この年の十月になって、夏目の側から来客の多いことへの対応策として、木曜日を面会日と定めるまで続く。

さて、この時森田は大学の最終学年にあり、卒業期を控えていた。卒業論文は必修であり提出期限は四月末日とされていた。森田はその題目を「沙翁の前駆者クリストファー・マアロウ」と決め⁽⁵²⁾、テキストを上田敏より、参考書を夏目より借りて準備を進めた。論文は英語で書くことが定められていた。準備中に森田が強い関心を寄せていた作家島崎藤村が『破壊』を自費出版という形で出版し、彼はこの作品に没入する。そして、夏目にもそれを伝え推薦するという経緯があり、卒業論文作成は進捗せず、完成したのは提出期限当日の午後2時であった。この論文を審査した夏目は、五月十九日付の書簡にその評語を記述している。「君の論文は大に短かい而してよく釣合がとれてよく纏って居るあれはマローの脚本が数に於て少ないのと其数の少ない脚本が三とも同種類の主人公で貫いて居る所為か又は君の手際がうまいのか。中略。君のかいたと思われる所が中々面白く出来て居る。但し綴字の間違に乱暴なのがあるのは驚ろいた。中略。然し大体の上に於て成功で結構であります。」⁽⁵³⁾ というのがそれである。卒業論文に合格した森田は、同期の19人の1人として東京帝国大学英文科を卒業した。

大学を卒業したことにより、夏目と森田の関係は教師と学生の関係から次の段階へと入って行くことになる。

結論

本論文によって明らかにし得たことは、森田と夏目の師弟関係の特質を構成する要素として両者が共に文学創作に強い潜在的意欲を持っていたということがあることである。そして、書簡による交信が極めて密度の濃いものであったという事実は、そのことと関係すると考えられるということである。書簡は言うまでもなく文字によって構成されるが、夏目にとっても森田にとっても、それは表現活動として強く意識され、したがって両者にとっては互いの意思、感情、思想の交信場面になっていたということである。以上のことより、夏目と森田の関係は両者の資質・願望の共通性によって特異な師弟関係を形成していたと考えられる。

（注）

1. 森田草平，夏目漱石，甲鳥書林，昭和十八年，107ページ。
2. 森田草平，師弟の情誼，文芸読本・夏目漱石Ⅱ所収，河出書房新社，昭和五十二年，28ページ。
3. 森田草平，続夏目漱石，甲鳥書林，昭和十八年，73ページ。
4. 同前書，78ページ。

5. 同前書, 79ページ。
6. 同前書, 75ページ。
7. 夏目漱石, 野村伝四宛書簡, 漱石全集第二十七卷所収, 岩波書店, 1980年, 277ページ。
8. 森田草平, 続夏目漱石 (前掲), 83ページ。
9. 同前書, 83～84ページ。
10. 同前書, 84ページ。
11. 野上白川, 大学教授時代其三, 文豪夏目漱石, 春陽堂, 大正十年, 73～74ページ。
12. 夏目鏡子述・松岡談筆録, 漱石の思い出, 文芸春秋, 1994年, 123ページ。
13. 荒正人, 夏目漱石, 現代作家論全集3, 昭和三十二年, 40～42ページ。
14. 松浦一, 大学教授時代其二, 文豪夏目漱石所有, 春陽堂, 大正十年, 61ページ。
15. 荒正人, 前掲書, 43ページ。
16. 夏目鏡子述, 前掲書, 165ページ。
17. 森田草平, 続夏目漱石 (前掲書), 104ページ。
18. 同前書, 105ページ。
19. 夏目漱石, 森田米松 (草平) 宛書簡, 漱石全第二十七卷 (前掲) 所収, 285ページ。
20. 同前書, 285ページ。
21. 同前書, 285ページ。
22. 森田草平, 続夏目漱石 (前掲), 138ページ。
23. 同前書, 140ページ。
24. 夏目漱石, 森田米松宛書簡, 漱石全集第二十八卷所収, 岩波書店, 1980年, 5ページ。
25. 酒井英行, 書簡, 国文学・夏目漱石を読むための研究事典所収, 学燈社, 昭和六十二年, 1～2ページ。
26. 夏目漱石, 森田米松宛書簡, 漱石全集第二十八卷 (前掲) 所収, 5～6ページ。
27. 同前書, 6ページ。
28. 同前書, 6～7ページ。
29. 森田草平, 続夏目漱石 (前掲), 142ページ。
30. 夏目漱石, 森田米松宛書簡, 漱石全集第二十八卷 (前掲) 所収, 7ページ。
31. 森田草平, 続夏目漱石 (前掲), 146ページ。
32. 夏目漱石, 森田米松宛書簡, 漱石全集第二十八卷 (前掲) 所収, 8ページ。
33. 荒正人, 夏目漱石 (前掲), 28ページ。
34. 夏目漱石, 正岡子規宛書簡, 漱石全集第二十七卷 (前掲) 所収, 86～87ページ。
35. 荒正人, 夏目漱石 (前掲), 203ページ。
36. 森田草平, 続夏目漱石 (前掲), 145ページ。
37. 同前書, 151ページ。
38. 同前書, 153ページ。
39. 小宮豊隆, 漱石の芸術, 岩波書店, 昭和十七年, 507ページ。
40. 同前書, 508ページ。
41. 同前書, 520ページ。
42. 夏目鏡子述, 漱石の思い出 (前掲), 176ページ。

43. 夏目漱石, 森田米松宛書簡, 漱石全集第二十八卷 (前掲) 所収, 18ページ。
44. 森田草平, 続夏目漱石 (前掲), 154ページ。
45. 夏目漱石, 森田米松宛書簡, 漱石全集第二十八卷 (前掲) 所収, 19ページ。
46. 同前書, 19~20ページ。
47. 森田草平, 続夏目漱石 (前掲), 160ページ。
48. 同前書, 23ページ。
50. 森田草平, 続夏目漱石 (前掲), 171ページ。
51. 同前書, 173ページ。
52. 同前書, 175ページ。
53. 夏目漱石, 森田米松宛書簡, 漱石全集第二十八卷 (前掲) 所収, 48ページ。

(注) 引用文中の旧漢字旧仮名遣いは原則として新漢字新仮名遣いに改めたことをことわっておきたい。